

Title	秋田市方言の「モノ」について
Author(s)	長澤, 亜希子
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2 P.18-P.24
Issue Date	2000-01
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/23174
DOI	10.18910/23174
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

秋田市方言の「モノ」について

長澤亜希子

【キーワード】 秋田市方言、「もの」と「モノ」、背景説明、発話の継続

1. はじめに

若者の話し言葉の中で、「～だもん」「～もんね」ということばがよく使用されている。終助詞の「もの（もん）」は共通語にもあり、一般に「理由・原因をあらわす」「女性や子供が甘えた口調で使う」などといわれているが、秋田では「もの（もん）」が共通語とは違った用法で用いられていることがある。例えば

(1) A: 私ね、昨日病院に行ったんだモンネ

B: うん

A: そしたら、同じクラスの太郎くんがいたんだよ！

というように、説明的な文脈で話がまだ続く場合に「もの」「もんね」が用いられるのである。

秋田方言の「もの」について詳細に記述した先行研究はほとんどないが、伝統的な秋田方言については藤原（1982）、現代の若年層における使用状況については佐藤・日高（1999）で若干触れられている。藤原（1982）では伝統的方言において「モノ」「オノ」「モン」「オン」「オ」という形式があるということの紹介にとどまっておき、意味・用法についての詳しい記述は見られないが、東北地方で使われている「もの」には「よ」と同じような意味あいがあるということが述べられている。また、秋田の若年層における「モン」の使用については、佐藤・日高（1999）の「気づかれない方言」に関する調査の中で取り上げられている。調査項目は

(2) その角を右に曲がると郵便局があるモノ。そこで待っていてください。

というもので、「～があるのよ、だから～」といった意味合いで用いられている「モノ」について調査している。結果としては、この場合の「モノ」は「標準語ではない」という回答が高かったが、3割近くが「普段の会話で使う」と答えている。

上のような「モノ」がどのような地域・年代の人が使用しているかということは未調査のため特定できないが、県内においても特に「秋田市」の方言であると意識され、実際秋田市を中心とした地域の人が多く使用しているようである。筆者自身も秋田市の人と関わるようになってから多用するようになったと自省している。したがって、タイトルにも掲げるように本稿では「秋田方言」とせず、あえて「秋田市方言」として特に若者における「モノ」について記述を行うことにする¹⁾。

2. 共通語の終助詞「もの」

共通語の終助詞「もの」について、『日本語教育辞典』や『日本語文型辞典』では次のように説明されている。

- ・ くれた会話中で文末につけて理由を表す
- ・ 「だって」を伴って用いると甘えた調子の理由表現になる
- ・ 子供や若い女性が主として用いる

話しことばにおいて終助詞「もの」は繁用されているにもかかわらず、その意味・用法についての詳細な考察はいまだ行われていないようである。方言における終助詞「モノ」が共通語の用法とどのように違うのかを明らかにするためには、共通語の「もの」についても考察する必要がある。そこでまずは2節で共通語の「もの」の用法について見ていくこととする。

2.1. 理由を表す「もの」

理由を表す助詞であるという点では終助詞化した「から」との類似性が見られ、置きかえることもできる。

(3) 借りたお金は返しておきました。もらいっぱなしはいやだ {もの/から}。(日本)

(4) わたし姉です {もの/から}。弟の心配をするのは当たり前でしょう。(日本)
ただし、上のように置き換えた場合その意味は全く同じとはいえず、「もの」の文には「～なのは当然だ」「～のはしかたない」というような意味合いが付加されている。

(5) A: どうしてついてきたの?

B: 心配だから

B': 心配だもの["ついてきた"]のは当然のことだ]

(6) ユリ: 私、彼と別れたの

マキ: どうして?

ユリ: だって、てんてる先生が、彼と別れないとよくないことが起こるって
うんだもん["別れた"]のはしょうがない (無印)

2.2. 理由を表さない「もの」

「もの」には「理由」を表さないものがある。

(5) まる子: ねえお父さん 花フダしようよ

a 父: やだ めんどくさい {もん/から}

まる子: ねえ やろうよオ おもしろいじゃん

父: やーだっ

b まる子: ケチッ いい {もん/*から/よ} おかあさんとやるから

父: かーってにすればー

(ちび)

上の (5a) の「もん」は理由を表しており「から」と置きかえることが可能だが、(5b) は理由を表しているとはいえず、この場合は「よ」と置きかえた方が自然である。

「から」も理由を表すものとそうでないものに分けられ、また理由を表さない場合は「よ」と置きかえることができる。

(6) 理由を表さない場合

何時になるかわからないけど、とにかく行く{から/よ} (無印)

しかし理由を表さない場合でも「から」と「もの」を置きかえると意味が変わってしまう。

(7) 私、待ってるから。[「早く来い」あるいは「絶対来てくれ」など相手に期待]

(7') 私、待ってるもん。[相手が来なくても勝手に待っているつもり]

また、理由を表さない「もん」は、反論するときや自分の正当性を主張するときに用いられることが多い。

(8) ひろあき: まる子の「ま」は まぬけの「ま」

まる子: ちがうもん ほんとの名まえは ももこだもん (ちび)

(9) 妹: お姉ちゃんだって、鈴木保奈美や牧瀬里穂と大ちがいじゃん

姉: そりゃ、そうよ。だけど私、努力したもん (無印)

理由を表さない場合の「もの」は「よ」と置きかえることができると述べたが、逆に「よ」を「もの」に置きかえるかどうか考えてみると、次のようなことがいえる。

(10) 「もの」は何の脈絡もなく新情報を提示することはない

A: あ、ちょっと、それ私のアイスだ {よ/*もん}

B: ちがう {よ/もん}、私のだ {よ/もん}

つまり、「もの」はなんらかの前提となる状況があってはじめて現れるのであり、その状況というのは「自分の認識とずれがある」ものであると考えられる。(10)を例にして考えると、AとBがお互いに自分のものだと思っているところに認識のずれがあるのだが、Bは「ちがう」「私のものだ」という情報を相手に示すというよりも、「誰が何と言おうと私はこう思っているのだ」ということ主張しているように感じられる。つまり「Xモン。」は、周りの状況が自分の認識とずれているという文脈をうけて、誰がなんと言おうと自分は「X」と思っている、という意味になる。

2.3. まとめ

以上のことから共通語の「もの」について簡単にまとめる。

(11) 共通語の「もの」は「自分はこうだと思っている」ということを示すが、その背景となる文脈・状況が「理由を述べる必要がある」場合とそうでない場合とに分けることができる。

もの①: Yは理由を述べる必要がある文脈

「Y。(ダッテ) Xモノ」(XはYの理由として当然だと自分は思っている)

もの②: Yは自分の認識と違っている文脈

(Yを受けて)「Xモノ」(Yという状況はあるが、とにかく自分はXと思っている)

3. 秋田市方言の「モノ」

秋田市方言において終助詞「もの」は、2 節で見てきたような用法の他に、共通語とは違った用法でも用いられている。次にあげる(12)～(16)は秋田県内出身の大学生による「モンネ」を使った作例である²⁾。

(12) 雪が降ってきた。冬だもんね。 (秋大)

(13) 絶対辞めないもんね。 (秋大)

(14) A: もうおめどは(あなたとは)いっしょにいがね!!

B: いーもんねー。私一人で行くから。 (秋大)

これらは共通語と同様の用法であり、(12)は2.3でまとめた「もの①」に、(13)(14)は「もの②」に相当する。

一方、次のような例は、他地域の人にとって不自然に聞こえる「もの」の使用例である。

(15) A: 今日カラオケ行こう。

B: ゴメン、私今日バイトあるんだもんねー。

A: そっかー残念だねえ。 (秋大)

(16) この道まっすぐ行くんだもんね、それから右に曲がってすぐだよ。 (秋大)

秋田では会話の冒頭の部分や、説明的な文脈で話し手の発話が続くとき、よく「モンネ」を使う。(15)(16)のような例では「今日はバイトがある」「この道をまっすぐ行く」ということは相手にとって未知の情報であるが、秋田市方言では「～ンダモンネ」という言い方をする。このことが他地域の人に違和感を与えているようである。

上の例文のように、秋田市方言の「モノ」には共通語と同じ用法の他に、方言特有の用法がある。本稿ではこれらの用法の違いをわかりやすく説明するために、便宜上、方言の用法の場合「モノ」「モンネ」などとカタカナ表記することとする。

3.1. 共起関係

「モノ」は平叙文とのみ共起し、疑問文や命令文とは共起しない。また質問調になることもない。「モノ」と共起する主な終助詞との承接関係は下の図のようになっている。ただし、「べ」については推量の場合に限り共起し、確認要求の場合は共起できない。

		べ (推量)		ナ			
(17)	行った	+	ケ	+	モノ	+	ネ
			ズ				

3.2. 背景説明

秋田市方言の「モノ」には、「理由を表さないカラ」との類似性が見られる。白川(1990)は「から」には「原因・理由」を表すものと「背景(相手が承知しておくべき前提知識)」を説明するものがあるとしているが、共通語の「もの」は後者の「から」とは置きかえられない。

(18) 原因・理由

A: どうしてそんなに厚着してるの？

B: あの教室さむい{から/もの}

(19) 背景説明

ソースはそこにあります{から/*もの}。[ご自由にお使いください]

ところが、方言の「モノ」は次のような場合にも使うことができる。

(20) あとでちゃんと返すから、500円だけ貸してくれない？

(20') あとでちゃんと返すモノ。500円だけ貸してくれない？

(21) うちの近くにおしゃれなレストランができたから、今度二人で行こうよ

(21') うちの近くにおしゃれなレストランができたモノ。今度二人で行こうよ

(20) (21) のような「から」は主節の部分の命令・依頼・勧誘などがスムーズに行われるように相手に前提知識を提示している。文の構造上、全く同じものとはいえないが、この場合の「から」と「モノ」の機能はほぼ同じである。

ただし、「モノ」の後に続く文は、命令・依頼などに限らない。

(22) A1: 昨日の1限テストだったんだモンネ

B: うん

A2: それなのに寝坊して遅刻しちゃった

後に続く文が A2 のように単なる事実の報告であっても、A1 の「モノ」は A2 の話題を提示するための背景を示している。談話の構造から見ると「モノ」は後に続く発話のための背景を説明しているといえる。

3.3. 発話の継続を示すマーカー

上に述べたように「モノ」は次に続く発話のための背景を示しているため、聞き手は「まだ話は終わっていない」と理解し、結果的にあいづちを打つ側にまわることとなる。このことは、いいかえれば「モノ」が「発話の継続」を示すマークとなっており、また「次の発話の順番を維持する」機能をもっているということになる。

(23) A: あのね、私昨日図書館に行ったんだモン

B: うん

A: そしたら別れた彼氏がいたモンネ

B: えー

A: 顔合わせんをやだから帰ってきちゃった

したがって、発話を続ける意図がないときに「モノ」で言い終わったり、聞き手が強引に次の発話の順番をとったりすると不自然に感じられる。

(24) A: 昨日6時頃どこにいた？

B: # 図書館にいたモンネ

(25) A: 昨日の放課後、図書館に行ったんだモンネ

B: # そうなの？私も放課後はずっといたけど、会わなかったね

3.4. 「モンネ」の「ネ」

ところで、秋田市方言の「モノ」の用法において、例文中あえて「モノ」という形式に統一するということはせず「モンネ」としたものもあるが、「モノ」「モン」「モンネ」「モンナ」などの形式の違いは機能上特に問題とならない。

(26) A: この間花子にケーキ屋さん教えてもらったんだモノ

B: うん

A: それがけっこういい店なんだモンネ

B: へー

A: だから今度一緒にいこうよ

個人差もあるが、若年層では「モン」「モンネ」ということが多いようである。また、「モンネ」「モンナ」の「ネ」「ナ」は間投用法であり、相手の注意をひきつける働きをしていると考えられる。「ネ」や「ナ」があってもなくても基本的には同じであるというのはそのためである。

3.5. 「モノ」の表現効果

3.3.で「モノ」は「発話の継続」を表すマーカーとなり、発話を続けるときに使うと不自然に感じると述べた。しかし「不自然に感じる」というよりはむしろ、後に何か続くはずのものが来なくて物足りない、あるいははっきり言わずにぼかしている、と言い換えた方が適切である。例えば次のような場面で「モノ」で言い終わることはよくある。

(27) A: 横山さんのお宅はこの辺ですか？

B: 横山さん？ちょっと聞いたことないモノナー…

このように何か尋ねられて答えるとき、例えば方言調査の場面などで「そんなことばは聞いたことないよ」「使わないよ」と答えるときに「モノ」が使われているのをよく耳にする。

これは「モノ」を使うことで断言を避け、文末をぼかしていると考えられる。「モノ」を使うと丁寧な表現になると内省されることがしばしばあるが、それは断定せずに文末をぼかして物腰をやわらげるという「モノ」の表現効果によるものであろう。

4. まとめと今後の課題

以上、秋田市方言における終助詞「モノ」について、共通語の「もの」「から」などと比較しつつ記述してきた。簡単にまとめると次のようになる。

A 共通語と同じ用法

もの①: 理由を表す場合 「Y. ダッテ X モノ」(XだからYは当然だ)

もの②: 理由を表さない場合 「X モノ」(誰が何と言おうとXだ)

B 共通語とは異なる用法

モノ：後に続く発話にスムーズにつながるための背景説明をする

「Xモノ」(Xなんだよ。それでね、…)

→談話における機能：発話がまだ続くことを示す

→表現効果：断言を避け、物腰をやわらげる

なお、今回の考察では若年層の使用することばを対象とし、年代差についてはあえて触れなかった。しかし、「もの」の使用には明らかに年代差が見られ、特に「もの②」は中年層以上ではほとんど使われないようである。これは秋田に限ったことではなく、共通語においても同様のことがいえる。ただし、「もの①」と「もの②」の違いは使用者の年代差にとどまらない。本稿では「もの」と「もん」という形式の違いを無視して考察を進めてきたが、両者間のニュアンスの違い、また文法化の度合いの違いということが問題となる。これらのことを踏まえ、共通語の「もの」についてさらに厳密に分析していく必要がある。

【注】

- 1) 本稿を執筆するにあたっては秋田市出身の友人(1975年生まれ。24歳女性。秋田市出身、在住。外住歴なし。)の協力を得た。作例の適格性などは彼女の内省により判断してもらった。
- 2) 秋田大学の日高水穂氏のご厚意により、講義受講者を対象とした調査を行った。調査の内容は「「もんね」を使った短文を作ってもらおう」というもので、調査実施日は1999年11月9・11日である。

【参考文献】

- 佐藤稔・日高水穂(1999)「秋田県大潟村移住者の言語変容—本格的調査にむけての準備調査報告—」『秋田大学教育文化学部研究紀要』人文科学・社会科学第54集別冊
- 白川博之(1990)「「カラ」で言ひさす文」『広島大学教育学部紀要』第2部39号
- (1995)「理由を表さない「カラ」」『複文の研究』(上)くろしお出版
- 藤原与一(1982)『方言文末詞〈文末助詞〉の研究』(上)(下)春陽堂
- 益岡隆志(1991)「終助詞「ね」と「よ」の機能」『モダリティの文法』くろしお出版
- 日本語教育学会編(1982)『日本語教育辞典』大修館書店

【用例の出典】

- グループ・ジャマシイ編(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版
- さくらももこ(1987)『ちびまる子ちゃん』① 集英社
- 群ようこ(1992)『無印失恋物語』角川書店

ながさわ あきこ(大阪大学大学院生)

Akiko.Nagasawa@mb2.seikyoku.ne.jp